

道風

道風記念館だより

第67号

発行日
令和五年六月二十日

編集・発行

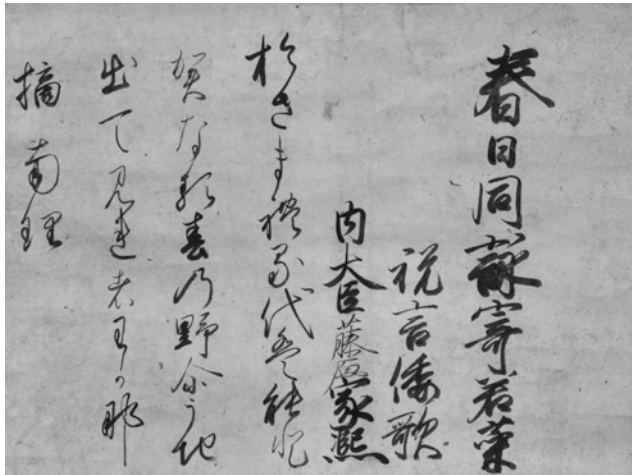
春日井市道風記念館

春日井市松河戸町五―九―三

電話(〇五六八)八二―六一〇

収蔵品紹介 近衛家熙和歌懐紙

一幅・江戸時代(一七世紀)

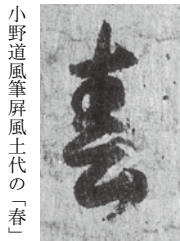


326×437mm

近衛家熙(一六六七〜一七三六)は江戸時代前中期の公家。父は近衛基熙、母は後水尾天皇の皇女常子内親王。公家として最高の家柄である五撰家筆頭の近衛家の嫡男として順調に官位を進めました。三十八歳で左大臣、四十三歳で摂政、四十四歳で太政大臣となり、位人臣を極めました。のち出家して予楽院と号しました。

家熙は博学で多芸多能の人でした。和漢の古典、有職故実、本草、金石、言語音韻などあらゆる分野の学問を深く研究し、また、茶、花、管絃、香道などの遊芸にも卓越した才能を示しました。

特に書においては、自家他所に伝来する膨大な数の古名跡を臨書し、小野道風や藤原行成らの和様の書をもととした独自の書風を確立しました。京都の陽明文庫には「予楽院臨書手鑑」など家熙の臨書が数多く残されています。



小野道風筆屏風土代の「春」

今回ご紹介するのは、家熙が自詠の和歌を書いた懐紙です。懐紙とは折りたたんで懐に入れておく紙のことです。日常の雑事や手紙などにも用いられましたが、

和歌会の際に詠んだ和歌を書き記すことも主な用途の一つでした。和歌を書いた懐紙を和歌懐紙といえます。

和歌懐紙には定められた書式があり、この懐紙もそれに則って書かれています。右端に手のひらの幅ほどの余白をとり、歌題を一、二行、位署(官位と氏名)を一行に書きます。この懐紙では「春日、同じく若菜に寄せて詠める祝言和歌」が歌題、「内大臣藤原家熙」が位署です。書かれた歌題を端作といいます。歌は三行三字に書き、最後の三字は漢字または万葉仮名にします。「おさまれる代はのどかなる春の野にうち出て見ればわかかななり」。「天皇のお力で御代がよく治まっている」と天皇を讃え、お祝いする内容です。最後の「南理」が万葉仮名になっています。

家熙が内大臣だったのは二十歳から二十七歳までなので、この懐紙はその間に書かれたものであることがわかります。和歌会場で懐紙を左手に持って書いた、若書きの書でありながら、堂々とした風格の感じられる書です。歌の二行目「春」などには、特に小野道風の影響が顕著にみられます。

中国古代の簡牘 4 木の札に書かれた手紙

福田 哲之

紙が普及する以前、手紙は多く牘とよばれる木の札に書かれていました。手紙を意味することは「尺牘」がありますが、これは「一尺の牘」の意で、かつて手紙が一尺（およそ二十三センチ）の長さの牘に書かれていた時代の名残です。

ところが二十世紀以降に出土した大量の簡牘の中に、文字どおり一尺の牘——尺牘に書かれた手紙が少なからず含まれており、古代の手紙の実態が明らかになってきました。今回はその中から、現在、実物として確認される中国最古の私信と見られる、およそ二千二百年前に書かれた手紙を紹介しましょう。

一九七五年十二月から翌七六年一月にかけて、



図1 睡虎地四号秦墓 十一号木牘

湖北省雲夢縣睡虎地に点在する十二座の秦代の墓の発掘調査が行なわれました。この時に調査された秦墓の中では、法律関係の文献を中心とする一一五〇余枚の竹簡が出土した十一号秦墓がよく知られていますが、今回紹介する木牘は、それとは別の四号秦墓から出土したものです。

木牘は二枚あり、それぞれ十一号、六号の番号が付されています。十一号木牘は黒夫と驚が中と母親に宛てた手紙、六号木牘は驚が衷と母親に宛てた手紙で、十一号木牘の中と六号木牘の衷とは同一人物と見られます（「中」と「衷」は同音）。十一号木牘のほうはほぼ完全な状態でしたが、六号木牘は下部のおよそ三分の一が失われています。以下では十一号木牘を中心に見ていきましょう（図1）。

前述のように縦の長さは当時の一尺にあたる二三・四センチ、横幅三・七センチ、厚さ〇・二五センチ。両面に書写されており、正面は五行で二四九字、背面は六行で文字が薄れて判読でき

ない部分がありますが一三二二字が確認されます（武漢大学簡帛研究中心等編『秦簡牘合集 釈文注釈修訂本（貳）』武漢大学出版社、二〇一六年）。

手紙という性格上、難解な箇所が多く、研究者によって解釈の異なるところもありますが、衣服や金銭の送付を依頼した内容であることは、おおむね見解が一致しています。試みに正面の冒頭から第五行・三字目までを口語訳してみましよう。便宜上、内容に従って段落分けし、人名と推定される文字に傍線を付しました。

二月辛巳の日、（私たち）黒夫と驚は謹んでおうかがいいたします。中と母上にはお変わりございませんでしょうか。黒夫と驚は変わりなく過しております。以前、黒夫と驚とは別々でしたが、今はまた一緒にになりました。

黒夫は乞就に手紙をこつづけ（その中で）「黒夫にお金を送ってください。夏用の衣服をもたずに来たのです」と書きました。手紙が届いたら、母上には、（そちらの）安陸の糸や布（の値段）が安く、単衣の上・下を作るのによいものがあれば、母上にはききとお作りいただき、お金と一緒に送ってください。もし糸や布が高いようであれば、お金だけを送ってください。黒夫がこちらで買って作ります。

黒夫たちは佐として淮陽におもむき、反城を攻めて長くどまっていますが、戦況はまだわかりません。どうか母上、黒夫に十分な費用を送ってください。手紙が到着したら、すべて返事をください。（以下略）

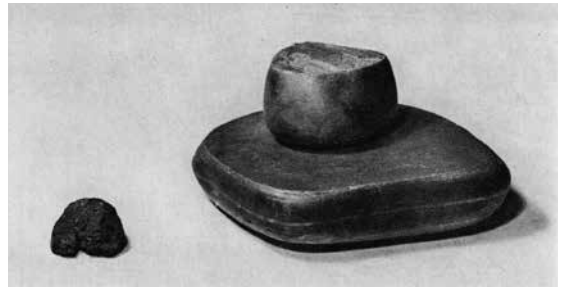


図2 睡虎地四号秦墓 墨・石硯（上：研墨石）

夫・驚と受け手の中とは母親を同じくする兄弟の關係にあり、木牘が出土した四号秦墓に埋葬されていた墓主は中と見られています。

四号秦墓からは、墓主の身分を示す直接的な手がかりは見つかりませんでした。大量の竹簡が出土した十一号秦墓については、『編年記』と名づけられた竹簡資料の分析により、墓主は喜という名の令史（書記官）で、郡県の役所で治獄（刑事事件の処理）にたずさわっていたことがわかりました。この十一号秦墓と比較して、四号秦墓は墓葬の規模が小さく、副葬品の数量も少ないことから、墓主の社会的地位は十一号秦墓の墓主よりもやや低く、中小の地主階層に相当すると推定されています（『雲夢睡虎地秦墓』編写組『雲夢睡虎地秦墓』

この手紙は冒頭の日付や内容から、始皇帝の天下統一（紀元前二二一）の二年前にあたる、秦始皇二十四年（紀元前二二二）の二月十九日に書かれたものと推定され、黒夫と驚は秦兵として楚と戦うために淮陽に従軍していたようです。文面によれば、送り手の黒

文物出版社、一九八一年。
ここで問題となるのは、送り手である黒夫・驚や受け手である中は、手紙を直接書いたり読んだりすることができたのか、という点です。当時においては、別の人に代筆を頼んだり、読んでもらったりした可能性も十分に考慮されるからです。

この問題を考える上で注目されるのは、四号秦墓の副葬品の中に墨（直径二・一、残長一・二センチ）と石硯（長さ七、幅六、厚さ二センチ）があったことです（図2）。石硯には墨を磨りつぶすための研墨石（長さ二・二センチ）が付随しており、両者には使用痕や墨痕のあることが報告されています。これらは墓主である中が生前に愛用していた文具であり、彼が文字を読み書きしていたことを物語る遺品と見てよいでしょう（ちなみに十一号秦墓からは墓主が生前使用していたと見られる毛筆が出土しています）。そうだとすれば、兄弟である黒夫・驚も同様に文字の読み書きができた可能性が大きいと考えられます。

また、先に紹介した十一号木牘には、乞就という人物に託して送った前便に関する言及や、手紙の返事を要求する記述が見えます。一方、驚が表（中）と母親に宛てた六号木牘には日付は記されていませんでしたが、その内容から六号木牘は十一号木牘の後に書かれたものと推定されています。こうした状況は、彼らにとって手紙のやり取りが、決して特別なものではなかったことをうかがわせます。

さらに留意されるのは、十一号木牘の中の「黒夫たちは佐として淮陽におもむき」という記述（第三段落冒頭部分）です。原文は「黒夫等直佐淮陽」とあり、これまで傍線部の「佐」は「たすける」などの動詞と解釈されてきました。これに対して近年、「佐」を官職名と見る新たな解釈が出されました（前掲『秦簡牘合集釈文注釈修訂本（貳）』）。先の口語訳はこれに従ったものです。

「佐」は最下級の官職ですが、この解釈に従えば、黒夫や驚は最下級とはいえ官吏として任用されていたことになりました。世襲的な基盤をもたない彼らが「佐」に任用されたのは、財産上の資格とともに一定の識字能力を有していたことが、大きくあずかっていたのではないかと想像されます。

古代における文字の使用について、私たちはともすると、きわめて限定されたイメージをいだきがちではないでしょうか。確かに初期の段階では、文字は限られた人々の専有物でした。しかし政治や経済などの発展にともなう必然的な流れとして、文字の使用は時代とともに拡大していきましました。その実態を限られた資料から正確に把握することはなかなか困難ですが、四号秦墓から出土した二枚の木牘は、当時、文字を読み書きする人々が庶民階層にも広がっていたことを示唆する、きわめて貴重な資料と言えるのです。（島根大学教授 ふくだてつゆき）

図版出典

図1 陳偉主編『秦簡牘合集（壹）中』武漢大学出版社、二〇一四年

図2 『雲夢睡虎地秦墓』編写組『雲夢睡虎地秦墓』文物出版社、一九八一年

展覧会

■1階展示室

館藏品展「書の魅力」

5月18日～7月10日

- ・様々な魅力をもつ館蔵の書作品を展示し、書の鑑賞方法を提案。
- ・学芸員による展示品解説 5月29日・6月26日

企画展「おののとうふう
～道風が生きた時代～」

7月15日～9月4日

- ・子どもにもわかりやすく小野道風を紹介した。
- ・ワークショップ「はじめてのふで」「秘密の特訓」「道風くんにチャレンジ!」を実施。

特別展「生誕110年記念
比田井南谷～線の芸術～」

9月9日～10月16日

- ・前衛書の魁のひとり、比田井南谷の代表作と臨書作品を展示した。
- ・講演会 9月10日
 - ①「線の芸術」比田井和子氏
 - ②「比田井南谷の臨書」高橋蒼石氏

企画展「松下芝堂」

10月21日～11月20日

- ・松下芝堂の代表作を展示した。

館藏品展「俳句の書表現」

11月23日～1月29日

- ・俳句を題材とした書作品を展示した。
- ・学芸員による展示品解説 12月18日・1月21日

館藏品展「白と黒のコントラスト」

2月1日～4月23日

- ・墨の黒と余白の白が互いに引き立て合った書作品を展示した。
- ・学芸員による展示品解説 2月26日・3月18日

■2階展示室

「第87回県下児童生徒席上揮毫大会作品展」

12月20日～1月9日

「第41回道風の書臨書作品展」

1月14日～29日

講座

「書にふれる、はじめての講座」

5月～7月 6回

- ・書にふれたことのないほどの初心者に向けた実技と鑑賞の講座。
- 講師 小川大槩氏、道風記念館学芸員

「高野切第一種をかく」

6月 3回×2

- ・伝紀貫之筆高野切第一種の臨書実技講座。
- 講師 近藤浩平氏

「手紙を楽しむ」

3月 4回

- ・江戸時代の文人の手紙を読んで楽しむ講座。
- 講師 山本祐子氏

第42回 道風の書臨書作品募集

道風記念館で開館当初から開催している公募展です。和様の書を創始した小野道風の偉大さを改めて考えていただくことを目的の一つとしており、小野道風の書だけでなく和様の書を継承し完成させた藤原佐理・藤原行成の書も課題の範囲としています。今回も奮ってご応募ください。

【この臨書展の特長】

- 出品料は無料です。入選作品は、当館で裏打ちして展示しますので、表装代もかかりません。
- 審査員は、当館顧問の古筆等研究家です。一般の部は、出品者名がわからない状態で厳正に審査が行われます。
- 審査の結果優秀に選考された作品は、記念館の収藏品として保存します。

- 臨書の対象 〈一般の部〉藤原佐理筆詩懐紙・伝小野道風筆秋萩帖
〈高校生部の部〉小野道風筆玉泉帖・伝小野道風筆本阿弥切
- 賞 優秀・秀作・入選
- 搬入締切 令和5年10月20日(金) 必着

※課題の部分が決まっていますので、募集要項をご確認のうえご応募ください。

※出品には出品票が必要です。要項・出品票をホームページからダウンロードするか、道風記念館へご請求ください。

